

[23]

氏名	陳旭 ^{ちん きょく}
博士の専攻分野の名称	博士（文化交渉学）
学位記番号	東アジア文化博第64号
学位授与の日付	2021年3月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	漢訳イソップに関する研究 —『意拾喩言』とその周縁からのアプローチ—
論文審査委員	主査教授 内田 慶市 副査 准教授 池尻 陽子 副査教授 奥村 佳代子

論文内容の要旨

本論文は漢訳イソップ史上、翻訳の質、量ともに他を圧倒的に凌駕する『意拾喩言』のその後への影響を中心に東アジアにおける「イソップ」の伝播の諸相を明らかにしようとしたもので、以下のような構成となっている。

序論

第一節 漢訳イソップと文化交渉

第二節 課題の選定と先行研究

第一章 イソップの漢訳史における基盤：『意拾喩言』

緒言

第一節 『意拾喩言』とそれ以前の漢訳イソップ

第二節 『意拾喩言』についての考察

第三節 『意拾喩言』の改訂版

第四節 『意拾喩言』の伝承とイソップ漢訳史における位置付け

小結

第二章 『意拾喩言』と漢訳イソップにおける方言訳

緒言

第一節 福建方言訳の先駆者：*Esop's Fables:Hok-Kien&Tie-Chiu*

第二節 福建方言訳の継承者：*Aesop's Fables in the Amoy vernacular*

第三節 福建方言訳の革新者：*long-sim Ju-Gian*(養心喩言)

小結

第三章 『意拾喩言』と近代新聞雑誌におけるイソップ寓話

緒言

第一節 『中西聞見録』におけるイソップ

第二節 『万国公報』におけるイソップ

第三節 『無錫白話報』におけるイソップ

第四節 『蒙学报』におけるイソップ

第五節 『小孩月報』におけるイソップ

小結

第四章 『意拾喩言』と日本

諸言

第一節 『意拾喩言』と『漢譯伊蘇普譚』

第二節 『意拾喩言』と『漢譯批評伊蘇普物語全一名伊娑菩喩言』

第三節 『意拾喩言』と『北京官話伊蘇普喩言』

小結

第五章 『意拾喩言』と中国人によるイソップのつながり

諸言

第一節 『意拾喩言』と『海国妙喩』

第二節 『意拾喩言』と『泰西寓言』

第三節 『意拾喩言』と『読書楽』

小結

第六章 『意拾喩言』と欧米人によるイソップのつながり

諸言

第一節 『意拾喩言』と *A Hand Book of the Chinese Language*

第二節 『意拾喩言』と *Aesop's Fables*

第三節 『意拾喩言』と『孩訓喩説』

小結

結論 『意拾喩言』とその周縁から見る漢訳イソップ

序論では漢訳イソップ史を概観し、イソップ研究と文化交渉学との関係性について論じている。

第一章では漢訳イソップの中で最も重要な『意拾喩言』について、先行研究を踏まえながらその翻訳史上の位置づけを行っている。特に、『意拾喩言』から『伊娑菩喩言』への移行とその成立順序に関する論述は今まで明らかにされていなかった問題であるが、本論文によってその成立過程が解明されている。

第二章からが本論文の中心的部分であり、先ず方言訳イソップを取り上げた。これまで方言訳イソップの存在は指摘されてきたが、具体的な中身の問題、つまり、広東方言、福建方言の詳細な研究はなく、本論文が初めてのものである。とりわけ、タイトルのローマ字からの同定は貴重な試みである。

第三章では近代報刊類に見られるイソップを詳細に論じている。『小孩月報』に収められ

たイソップについてはこれまでも取り上げられているが、他の報刊類に関してはこれまでほとんどなかったものである。

第四章も非常に興味深い内容であり、日本の和刻本の底本と日本語訳イソップとの関連性も示されている。

第五章では中国人の手になりイソップを取り上げ、『意拾喩言』との継承性やその新規性についても論じられている。

第六章はヨーロッパ人による教訓物テキストに収められたイソップを論じている。

結論では『意拾喩言』とそれ以降のイソップを「周縁からのアプローチ」に手法で手堅くまとめている。

論文審査結果の要旨

本論文は漢訳イソップを大きく『意拾喩言』以前と以降に分けて先行研究を踏まえた上で、現在入手可能な資料をほぼ網羅的に丹念に収集、分析しており、その点が先ず評価される。

第一章では、1840年に刊行された『意拾喩言』がその後『伊娑菩喩言』と名を変えて再び登場するが、上海施医院版と香港英華書院版、文裕堂版の3つの版本の違い、成立順序について各寓話のタイトル名等の詳しい分析から最初に上海版が出来上がり、次に英華書院版、そして最後に文裕堂版が成立したことを明らかにしている。更に、それを元に、第四章では日本で出版された『漢訳伊蘇普譚』と『漢訳批評伊蘇普物語』の底本等についても解明した。また日本における漢訳イソップに関しては『北京官話伊蘇普喩言』も取り上げて渡部温の『通俗伊蘇普物語』との関係も詳しく論じている。

第二章の方言訳漢訳イソップに関しては、これまで内田 2001 などでも触れてはいるが、内容まで踏み込んで検討を加えたのは本論文が初めてであり極めて意欲的な論述であると評価できる。

また第三章の近代報刊類に見られるイソップについても、ここまで詳細に論じたのはこれまでほとんどなくその点も本論文の優れた点とすることができるだろう。

第五章の中国人の手になるイソップに関しても、『海国妙喩』『泰西寓言』『読書楽』を中心に取り上げ、『意拾喩言』との継承性とポスト『意拾喩言』の芽生えを明確にしている。

以上のように、『意拾喩言』以降の漢訳イソップに関して、翻訳の手法、編集の目的、文体の違い等々から近代漢訳イソップの諸相が明らかにされ、今後の漢訳イソップ研究に大きく寄与するものと思われる。

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。